

# 暇つぶしネタ集

原罪

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

現状やる予定はございません

# 目次

ここは世界の最果て	1
黒い白鳥	16
【輪廻聖杯 — Fate / Reincarnation —】	30
OPネタ「ありふれない仲間たちと異世界へ — The End of the World」	33



# ここは世界の最果て

「——マジかよ、おい」

男は目を覚ます。この未知の景色に

男は目を覚ます。この不可思議な世界に

「……こいつあ、女神が俺にもう一チャンスくれた、つてわけじゃねえよな」

周りを見渡すと、どこかのスタジアムのような場所に、男は立っていた

自分の他にも、この状況に戸惑う者、変に騒がず沈黙する者、ただこの状況を冷静に見極めていたりする者

集められた人々に共通点はない。ただ、男としてはこの不可解な状況には『慣れて』いた

なぜなら——男は既に『二度』死んだことがある

一度目は船上におけるいざこざで、そして二度目は、『二度目の生』を賭けた『選定』に破れて

一度も勝利したことなかった男は、『選定』の中で満足気に散るはずだったが、この状況はどう言うことだ？ 自分は今こうして生きている。地面の踏みしめ立っている。

「——よお、フェデリーコ。」

男の背後から聞き慣れた声がした。振り返ればそこにいるのは黒肌をした一人の女性

「——オデット、アンタもいたのか」

——彼女の名はオデット・マランソン

男——フェデリーコ・カルミナーテ同様、かの『選定』における参加者の一人で、フェデリーコと関係の深い人物でもある



「しっかしまあ、一体何がどうなってるんだかな。まさかと思うがこれも『運命の女神』サマってやつなの催し……わけじやねえよな」

「いや、アンタでも分からねえつてのに俺がわかるわけ無いだろ……しっかしまあ、どんだけ集まってるんだかな」

数分ほど経過し、考察と雑談が入り混じったような会話をする二人。どちらもあいかわらず、というのはフェデリコとの談であるが

オデットのの方はフェデリコと再開するまではちゃんとこの状況への認識と調査をある程度終わらせていたようである

「で、だ。てめえと鉢合う前にちよつくら歩いてみたんだが……専ら予想した通りだが、外へ繋がる扉は全部塞がれてやがる。

アタシの他にも妙な手段で扉をぶつ壊そうとした連中がいたが、そいつでもダメだったようだ」

「妙な手段？」

「ああ、まるでアニメとか漫画とかで出てきやがるファンタジーみたいな恰好しやがった連中だ。魔法っぽいこととしてやがったからな」

「おいおい……」

オデットの話はフェデリーコには文字通り頭が痛くなりそうな内容であった。

選定の儀、運命の女神パルカ、今までに現実的にありえない超常的光景は目の当たりにしてきたが

ここまで行くとファンタジーというかそういうメルヘン感が薄れていくというか何というか、である

「それに、アタシら同様巻き込まれた連中の中には、他の選定参加者もいやがった。アタシが確認できたのは獅子舞凜火とあん時のガキンちよか」

「ガキンちよって、スカイツリーでテロ起こしたアイツのことか……で、獅子舞凜火、海晴とかいうのがご熱心だったあの女の子か」

同じ選定参加者も巻き込まれている——オデットが確認したのはテロ起こした少年『ユウ』と、『獅子舞凜火』

確認できていないが他にも選定参加者がいる可能性が高い、というのがオデットの見解であった

「……もし、あの野郎がいるってんだったら、この妙な状況も悪くはねえだろうな」

オデットの言っていた『野郎』というのは、俺が脱落した10回目の『選定』において獅子舞凜火に脱落させられたアラン・スコープピオンの事だろう



こいつはいつまで立っても相変わらず……などとフェデリーコが思っていた時であつた

「御機嫌よう、運命の奴隷の皆様——と、冗談はこれくらいにしておこう」

二人の耳に、聞き慣れたフレーズと聴いたことがない女の声が出た

○ ○ ○

夜空やスタジアム内の照明に照らされる、文字通り『宙』に浮かんだ軍服の女性。おそらく先の台詞の発言者であろう人物

「——これは一体どう言うことだ？ 話は違うではないか？」

群衆の中のひとり、重装な鎧を身にまとった金髪の女騎士らしき人物が問いかける

「……あいつはあん時、扉をぶっ壊そうとしたやつか」

「あれ、何かのコスプレじゃなくてマジでああいうやつなのかオデット」

「アタシに聞くな、というかあいつがコスプレなのかマジモンなのかは今はどうでもいい。後今は静かにしろけフェデリーコ」

軍服の女性がこの場に現れ周りの雰囲気は急激に変化した。一部の人物は彼女のことを知っているのか身構えたり、警戒している

フェデリーコは軍服の女性や金髪の女騎士の恰好がコスプレじゃなさそうなことに若干動揺と興味を示すも、オデットに静かにするように咎められた

その最中であつてもオデットは周りの確認は行っていた

まず軍服の女性の登場に『まるで顔を知っているような』反応を示したのはさっきの女騎士を含め7名。そのうちの一人……笑い袋に顔がついたような雰囲気醸し出す黒い髪の女は

オデットの視線に気づいたのか、彼女に向けて一瞬だけ不気味な笑みを向けていたそれと自身とフェデリーコ、そしてフェデリーコから得られた情報によつていることが判明した2名を加え、

この場にいる『選定』参加していた人物は7名。そして参加者ではないものの『選定』

に介入していた人物を加えると8名である

その中には、オデットにとってのある意味の好敵手——アラン・スコープピオンの姿もあつた

今にも昂ぶりそうな心を抑えながら、オデットは宙に浮かぶ軍服女と騎士女の会話に耳を傾ける

「すまなかつたな騎士殿、少々こちらでも事情が変わつてな」

「事情、だど？ 無関係な民までも巻き込んでか？」

「ああ、それに感してはなんら問題はないよ。何故なら、彼らはそれぞれ非日常に縁のある人物でね。

確かに無関係というのではれば騎士殿の言うとおりであるが——いや、これは余の協力者が集めたものであるな」

「集めた、だど？ 一体何を行うつもりだ？」

思つた通り、騎士女は軍服女の知り合いか何かのようである。だが、騎士女の表情や声色を見る限り今回の事は想定外らしい。身内の揉め事なのかそれとも別のなにかかどうかは、今のオデットやフェデリコには分かるはずもない。

そして、軍服の女が次に発した言葉は——

「何、斯くも下らぬただの殺し合い。そう、『バトル・ロワイアル』だ」

「「——ツツ!!」」

「……ほう、そういうことか」

この場にいるごく一部を除く、全ての者に動揺と衝撃を与えるには有り余る情報であつた

フエデリーコ・カルミナーテは軍服女の発言にひどく混乱していた

殺し合い？ バトル・ロワイアル？ 確かに『選定の儀』も生死に駆け引きと言つてしまえば何ら変わらない。だが、あの時はどんなことになるうとも選定の参加者は死なないようになつていた。あくまで生死を決めるのは選定の時のみだ

それがあの女は間接的に「お前たちには殺し合いをしてもらう」と言つたようなものだ。選定の儀でさえわけわかめだったのに宙に浮いている女やらで既に頭がいっぱいだ

……等のオデットは少し沈黙しながらも笑みを浮かべ、周りを冷静に見渡している。アイツの精神性が一体どうなっているかわかんねえっつーかなんっつーか

オデットのやつ、マジでこの殺し合いに乗るつもりか？ いや、まだ決まつたわけ

じゃねえ。確かにアイツにはある意味『子供を作りたい』という未練はあるが、それがアイツが殺し合いに乗るかどうかにつながるかなんてまだわからねえ

だが、今回はアイツに習って冷静に周りを見渡すことにしよう

「簡単なことだ、貴様たちにはこれより余が創った箱庭の中で面白おかしく殺し合ってもらおう。最後の一人になるまで生き残った者にはどんな願いをも叶えてやろう。そうだな、億万長者、世界の平和、死者の蘇生、復讐——それに、『運命の改竄』も可能だな。例えば『使命を果たし終えたら存在そのものが消滅してしまう者たち』を生かすことも、な」

最後だけ妙に含みを入れた言い方をした軍服女だが、周りを見てやつの最後の発言に反応したやつが2〜3名ほどいた。

——いや、露骨に動揺していたのは1名か、なんかバレリーナやってそうな足してやがった女のがキだ。

周りを見りや、さっきの殺し合い発言に動揺していた連中もいりや、変に落ち着いたやつだっていた。例を挙げるなら黒髪のワイルドそうな格好の女や、小学生ほどの女子供。それに妙に筋肉隆々な連中もいたが、あいつらに至っては喜んでそうな顔してたやつが何名かいやがった。

「で、次にだ。各々、自らの首元を確認してみるが良い」

言われるがままに首元を確認する。そこにはいつの間にか取り付けられていたであろう銀色の首輪のようなものがあつた。それは俺だけでなく、他の連中も同じく

「その首輪は余の特注品でな、大きな衝撃を与えたり、後述するルールに反したり、無理に取り外そうとするなら即座に爆発し、装着者の命を柘榴のごとく弾け飛ばす。」

詰まる所、勝手な真似を防ぐための代物、か。無理に外そうなら死。いや、あの女に逆らおうものなら、即座に殺される……つてか

「続いてルールについてだ。先んじて余が申した通り、ここにいる68名には余の箱庭で最後の一人になるまで殺し合ってもらう。このゲームにタイムリミットはない、最後の一人が決まるまでな。」

「箱庭で殺し合ってもらうにあたって、各々に道具を用意した」

そう言い、軍服女が指をパチリと鳴らすと、空間にノイズが走る。そのノイズは黒いカバン、スマートフォン、そして一枚のカードへと変貌し、それぞれ俺達の前に現れた「黒いカバンは《デイバッグ》だ。腕時計や懐中電灯、食料品や応急キット等の基本的な物資の他に、この殺し合いの役に立つ道具が3つ入っている。それをハズレと取るかアタリとするかは自由だ。スマートフォンは箱庭の地図と此度の参加者の名簿を兼ねておる。そしてその一枚のカードだが……参加者の☒願望☒が記載された《願望カード》だ」

《願望カード》……『選定』で言うところの『未練』が記載されたカードと似たようなも

のか？

「これらは全てゲームの開始時に貴公らに自動的に支給される。次に《禁止エリア》についてだ。スマートフォンにデータが入っている地図を確認したまえ。そこに載っているのが貴公らが殺し合いを行う余の箱庭だ。」

「線で区分されている通りご察しの通り、6時間の死亡者を知らせる放送毎にランダムに選ばれたエリア3つを《禁止エリア》として立ち入りを禁止させてもらう。そして、もし何かの間違いでそのエリアに踏み込んだ場合……どうなるかは余が言うまでもないだろう。ああ、放送を聞き逃しても心配しなくとも良い、スマートフォンには放送で流れた情報が自動的に記録されるようになっていいるからな」

「——そうだ、言い忘れていたことがあった。その《願望カード》だが、会場中心部で執り行えるある『ゲーム』のための重要な代物だ。せいぜい紛失したり、誰かに奪われないうように気をつけることだな」

……ゲーム？ 態々願望カードなんぞ用意したってことは……いや、なんとなく予想はつくが、それをアイツに聞いたところで答えてくれなさそうか

「さて、一通りのルール説明がすんだわけだが、次に行うは少しばかりの余興を……と

思っていたのだから」

軍服女がそう呟くと、向こう側から白い翼を生やした金髪の男が軍服女の近くに降り立つ。よく見ると、その男の両手には丸い『なにか』を持っているように見えている。そしてそれが何なのかを理解した俺は……戦慄した

なぜならそいつが持っているのは、紛れもなく『生首』だ。右手には男の生首一つ、左手には髪型から察するに女のガキの生首一つ。だが、この距離じゃ顔の確認はできない「どうしたのだね、未元物質殿？ その二人は確か余が見せしめのために用意していたはずだが？」

「ちよつくら問題があつてな。あのジジイの確認不足か知らんが、妙な手段で抜け出してやがった。変にやるもんだからな、勢い余つてつい殺しちまった」

言葉から察するにあの未元物質ダイクマターとか呼ばれた男が殺しやがったのか。俺が言えた立場でもねえが、残酷なことしやがるもんだ

「……そうか、そうでは仕方がない。首輪の威力を彼らにその眼で確認させたがったのだかな」

「だが、せっかくだ、この首は関係者に返してあげるとしよう」

……関係者に返してあげる？ 思考がまとまらない俺の眼の前で、あの軍服女は男が持っていた2つの首を、その関係者らしき人物へと放り投げていた



投げられた首、男の首は例の女子供のガキ達のところへ、そして女のガキの首は見るからに和風つばい格好してやがる連中の方へ

マフィアでもあんなマネはそうそうするやつはいねえ。俺はあの軍服女の狂気性を改めて再確認し、首が投げ込まれたの2つのグループに目を向ける

そりやもう酷い有様だ。男の首が投げ込まれた方は、黒髪のガキが「お兄ちゃん」つて叫んで泣き叫んでいた。白髪のガキはどうにも後にも憤つていやがったが、褐色のガキの方に抑えられている

女のガキの首が投げ込まれた方に至つちや、犬耳？がついたけつたいな美人がそいつの首持ったまま一切動かないままだし、隣りにいたであろう仮面の男も黙ったままだ。

「まあ——些細なアクシデントではあったが、これにて狂宴の準備は整った」

軍服女が下卑た笑みを浮かべ、まるで指揮者のように片手のサーベルを振るう

「——待ちやがれ」

「——ぬ？ 貴公は確か、上条当麻、か」

笑みを浮かべた軍服女が声が聞こえた方への顔を向ける。俺も同じく顔を向けると、一人の少年の姿が。

「一つだけ聞かせて欲しい、テメエらは一体何のためにこんな事しやがった？ 何のた  
めにいろんなやつを巻き込んだ？」

「——その問いに意味など無いな。ただ、余が楽しめればそれで良いのだ。貴公らが奏  
でる殺戮と狂乱の宴を見せてくれればな」

「そうかよ、テメエがくそつたれなやつってのはよーつくわかった。」

「じゃあそこで待っていやがれ、テメエのそのふざけた幻想、絶対にぶつ殺してやるから  
な！」

上条当麻と呼ばれた少年の啖呵を聞き届けた後、軍服女がサーベルを宙に振るう。軍  
服女から光が放たれる。それは俺たちが何も見えなくなり、意識を喪失するほどに光り  
輝いている

「そうかそうか、確かに貴公らしい啖呵だな、イマジネーション幻想殺し。だが、その貴様の在り方は、そ  
の物語は——余が最も忌み嫌うものだ」

軍服女がなにか呟いたように見えたが、今の俺には何を言ったかは分からない  
そして意識が完全に喪失する刹那

「さあ、始めようではないか。この、愛憎と狂乱、希望と絶望、そして可能性に満ちた――」

「――余の復讐劇を」

――そして、全ての幕は開ける

【衛宮士郎（美遊の兄）@Fate/Kaleid liner プリズマ☆イリヤ 死亡  
亡】

【アンジュ@うたわれるもの 二人の白皇 死亡】

【主催】

【アルタイル@Re:CREATORS】

【垣根帝督@とある魔術の禁書目録Ⅲ】

## 黒い白鳥

—— さよならなんて、したくない

○○○

混沌なる箱庭、牽牛星の姫によって産み落とされた殺戮の舞台

エリア北西部B—3——『アバル村』

『ある少女』の運命の始まりたる祠の前に、一人の少女が立ち尽くしている

少女の頭には、あの時軍服の姫君が発した言葉の意味が分かっていた

—— それに、『運命の改竄』も可能だな。例えば『使命を果たし終えたら存在そのものが消滅してしまう者たち』を生かすことも、な

あの言葉の意味を少女は知っている。いや、否応なく理解してしまっている。

いや、最初から分かっていた、ただど嫌だった。そんな事を思ってしまう自分が嫌だった

『優勝して、ユズとライムが居なくならないようにする』

そんな考えが思いついてしまった自分が嫌だった

もし無事元の日常に戻ったとして、リフレクターとして原種を倒して使命を果たして、それで結局二人が消えることには変わりはない

そんな残酷な運命を受け入れられない自分の心を嘲笑うかのようにあの軍服の女性はあの発言をしたのだろうか

どちらも選べなかった。全て解決した所で二人が消えてしまう。だからといって殺し合いには――

「やつほー、マガネちゃんの声聞こえてるー？」

そんな彼女――白井日菜子の心境に土足で入り込んできたのは、自分とは対称的な、黒いセーラー服の女性であった。



「いや、よかったよかった！ いきなり変な所へ飛ばされたもんだからマガネちゃん寂しくてきてさあ。こんな所で可愛い子ちゃんと出逢えるなんてラッキーハッピーうれぴーなー！」

「……………何なんですか本当に、あなたは」

「何なんですかと言われましても、マガネちゃんは十中八九マガネちゃんなのだ！ というよりもマガネちゃん名乗ったんだからそっちも名乗るべきだと思うのだよ」

「……………白井、日菜子。」

「日菜子ちゃんねえ……………じゃあヒナちゃん、かな？」

「……………」

まるで何を考えているか分からない。高いテンションと軽いノリ、今の日菜子にとって面倒くさくて煩わしい存在に過ぎない。それによりにもよってこんな胡散臭い女性に『ヒナちゃん』呼ばわりされる事が無性に腹が立っていた

「……………それで、私に何か用事ですか？」

「用事も何も、ヒナちゃんがなんだか悩んでるようだったので気になったのだよ。何な

ら人生相談は受け付けてあげるけど？」

「……人の悩みを踏み荒らさないで。あなたに私の何がわか「分かるよ？ お友達を、ユズちゃんとライムちゃんを生きながらえさせたいんでしょ」——!？」

日菜子の脳内は一瞬白紙に塗りつぶされそうになった。何故か自分のかけがえのない友達、ユズとライムの名前を、そして私の友達であることをズバリ引き当てたのだから

「どうし、て、それ——」

「ルール説明の時、マガネちゃんは周りの会話やら顔やらをちゃんと確認していたのだ。いやあ、知らない単語ばかりでマガネちゃんもこれにはびつくらこいたさ。で、マガネちゃんの近場にヒナちゃん達や他数名がいたから、バレないように聞き耳を立てていたのだよ。」

「そしてその中で『ユズ』、『ライム』って一人称を使っていた女の子を見つけたわけ。この時は別になんともなかったけど姫君ちゃんの説明に露骨に反応していたヒナちゃんを見かけてさ、事情はわかんないけどビンゴ！ってわけ」

「まあ他にも人語を解するステツキやら禍々しいオーラを醸し出してるおつかない女もいたし、そーいやあの姫君ちゃんに真っ向から啖呵切った幻想殺しの少年も気になるかなあ？ まあそれはお・い・と・い・て——」

「——ぶっちゃけ乗っちゃっても良いのだと思うのだよ、殺し合い」

「——は？　——え？」

わけがわからない。目の前の彼女が何を考えているのか、日菜子には分からない。自分にどうしてほしいのか、自分をどうしたのか。マガネと名乗った女の考えが、何一つ理解できない

「だつてさ？　どうせどんな夢でも叶えられるのなら、友人も知り合いも赤の他人もみんな殺して、そつから自分の友達や知り合いのみを、殺し合いでの記憶を消した上で蘇らせれば良いのだよ」

「——!?　そんな、そんな事出来るわけ——!?」

「じゃあどうするの？　このまま泣き寝入りする？　大切な友達が消えちゃうっていう運命受け入れるの？　嫌だよねえ？　諦めるよりやつて見る価値あるよね？　ねえ？

ねえ？」

「でも、殺し合いに乗るなんて私は——」

「いい加減受け入れるのだよ、これは面白可笑しい殺し合い、すなわちバトル・ロワイアル。生き残ったただ一人がどんな願いでも叶えることが出来る。それこそ『どんな願い』でも」



——もうやめて、これ以上私の心を惑わさしないで、私の心をかき乱さないで

「どうせ蘇るから」なんて考えはしたくない。そんな事をして生きながらえることなんてユズもライムも望んでいない。私はみんなを傷つけたくない

「そんなくだらない良心なんて綺麗サツパリ捨ててしまえばいいのに」

—— 黙れ

「こんな薄情者な友達を持つてそのユズちゃんとライムちゃんとやらも可哀想だねえ」

—— 黙れ、 黙れ、 黙れ

「君が一步踏み出せば彼女たちは生きながらえられる。なのに君は一步踏み出すことをしない。薄情者じゃなかったら何ていうのかな? 偽善者?」

—— 黙れ、 黙れ、 黙れ、 黙れ、 黙れ、 黙れ

「——君つてさ、



「黙れええええええええええツツツ!!!」

○  
○  
○

「——あ」

「満足した？」

気付いた時には既に遅かった。日菜子の衣装は白いセーラー服ではなく、リフレクターとしての綺羅びやかなものとなっており、手にした剣には——血が滴っていた

目の前の女の頬には自分が切ったであろう傷が付いており、そこから血がポトリと落ちて  
ちている

「——わ、わたし——ちが、そんなつもり——」

「やれば出来るじゃないか？ マガネちゃんはちゃんと一歩踏み出してやれる子は大好きなのだよ。そう、結局君は自分の願いのために他人をゴミをのように切り捨てられるのだよ。おめでとうヒナちゃん！ 相手がマガネちゃんじゃなかったら殺人童貞卒業だよ！」

「あ——ああ——」

「いい加減認めたらどうなのかな？」

——ヒナちゃんは友達を失いたくないんでしょ？

心が黒く染まっていく。底なし沼に沈んでいく

足掻いても足掻いても白鳥は沼から抜け出せない。

そうだ、私は失いたくないんだ。失いたくない

更紗も、有理も、麻央も——何より、ユズも、ライムも

失うなら、一度自分で捨てて直せばいい

全てやり直せばいい、リセットすればいい

どうせ全て忘れてやり直せるから

声が聞こえる。優しい声が、自分を止める優しい声が

でももう聞こえない。泥の中では何も聞こえない

泥の奥底に星が見えた。赤い、朱い、紅いエトワール一番星だ

手を伸ばす、私はそれに手を伸ばした——心が晴れやかになった気分だ

ああ、なんて清々しい気分



「いい目をしてるよヒナちゃん、すごく、悪い☒『いい目』」

「言いたいことはそれだけですかマガネさん、だったら早く消えてくれませんか?」

「そう言われちゃ仕方がない、ではマガネちゃんは退場するといたしましょう——あ、これはマガネちゃんからのプレゼントなのだよ」

マガネが投げた『何か』を白菜子はキャッチする。それは何かの『仮面』

「この仮面、アクルカって名前らしいんだけど、マガネちゃんはあまり仮面とか興味ないからヒナちゃんにプレゼント、困った時はこれを使ってね」

「……………」

最後の最後まで何を考えているかわからない女、マガネは夢のように去っていった。残されたのは血に落ちた孤独な星が一人だけ

もう決めた、決めてしまった。後戻りはできない。

「——ごめんね、みんな。でも安心して、全て短い悪夢になるだけだから」

——黒鳥は、もう二度と白鳥に戻ることはないのだ

【B-3 / アバル村 / 一日目 黎明】

【白井日菜子@BLUEREFLECTION 幻に舞う少女の剣】

〔状態〕：異常

〔服装〕：リフレクターの衣装

〔装備〕：

〔道具〕：基本支給品一式、スマートフォン、願望カード、不明支給品3つ（本人未確認）、ヴライの仮面@うたわれるもの3 二人の白皇

〔思考・行動〕

1：優勝してユズとライムを消滅の運命から救う

2：邪魔をするなら例え友達でも容赦はしない、どうせ蘇らせるから

〔備考〕

※本編第11章、原種イエソド一戦目終了後からの参戦です

○ ○ ○

「——斯くして、人魚姫は魔女へと変わってしまいました、と」  
所離れて別のエリア。鼻歌を軽快に鳴らしながら歩く嘘つき道化師<sup>築城院真因</sup>

(しっかしまあ、あの姫君ちゃんも面白そうな催し物を考えたものだにや、こりや騎士サマは一本取られた感じ、かな?)

様々な物語世界から呼び寄せられた登場人物さんかしやたち。

其れ等が何を紡ぎ、何を奏でるかは彼女には関係ない。

ただ自分が面白そうだと思う事を、実行する。彼女が通り過ぎた跡が例え更地に成ろうが血の海になろうが彼女の知ったことではない

(さて、次は何処に向かおうか、例の幻想殺しちゃんにも会ってみたいところだけど、まずはちよつとした仮拠点でも確保しよう、かな?)

彼女の瞳が写すは真実か、それとも嘘か

【B-3 / 一日目 深夜】

【築城院真☒@Re:CREATORS】

【状態】:

【服装】:いつものセーラー服



〔装備〕：なし

〔道具〕：基本支給品一式、スマートフォン、願望カード、不明支給品2つ（本人確認済み）

〔思考・行動〕

1：自分が面白いと思った事に身を委ねよう！

2：仮拠点作り

3：幻想殺しには会ってみたい

〔備考〕

※本編15話、アリステリアとの対談後からの参戦です。

# 【輪廻聖杯 —Fate/Reincarnation—】



——キミが微笑む世界が、永久に続きますように

- No. マスター サーヴァント 名前 出展作 クラス 真名 出展作  
 No. 01 リラ・ティザイアス ライザのアトリエ 常闇の女王と秘密の隠れ家  
 セイバー 幡田零 CRYSTAR | クライスター No. 02 天本彩声 C  
 aligula Overdose  
 | カリギュラ オーバードーズ | セイバー アルシエ・アナトリア よるのない  
 くに2 | 新月の花嫁 | No. 03 結城友奈 結城友奈は勇者である セイ  
 バー アルトリウス・コールブランド テイルズオブベルセリア No. 04 琵琶  
 坂永至 Caligula Overdose | カリギュラ オーバードーズ |  
 アーチャー 土居珠子&伊予島杏 乃木若葉は勇者である No. 05 比治山隆  
 俊 十三機兵防衛圏 アーチャー 鷲尾須美 鷲尾須美は勇者である No. 06  
 三好夏凜 結城友奈は勇者である アーチャー ザビータ テイルズオブベルセリ

- ア No. 07 アラン・スコピオン Fatal Twelve ランサー  
 カルナ Fate/Apocrypha No. 08 平和島静雄 デュラララ！  
 ランサー 本多忠勝 無双OROCHIシリーズ No. 09 松野おそ松 おそ  
 松さん ライダー オシユトル（ハク） うたわれるもの3 二人の白皇 No. 1  
 0 ローリー・ゴッドスピード 殺人探偵ジャック・ザ・リッパー ライダー アイゼ  
 ン テイルズオブベルセリア No. 11 松野チヨロ松 おそ松さん キヤス  
 ター 姐己 無双OROCHIシリーズ No. 12 梶子 Caligula  
 Overdose—カリギユラ オーバードーズ— キヤスター プク・ブック 魔法  
 少女育成計画QUEENS No. 13 沖野司 十三機兵防衛圏 キヤスター  
 アヴィケブロン Fate/Apocrypha  
 No. 14 アーサー・ヒュイット 殺人探偵ジャック・ザ・リッパー アサ  
 シン ジャック・ザ・リッパー Fate/Apocrypha No. 15 st  
 ork Caligula Overdose—カリギユラ オーバードーズ— ア  
 サシン ジョーカー THE DARK KNIGHT No. 16 ライザリン・  
 シュタウト ライザのアトリエ 常闇の女王と秘密の隠れ家 ー バーサーカー  
 アーナス よるのなくに No. 17 折原臨也 デュラララ！ バーサーカー  
 クオン（ウィツアルネミテア） うたわれるもの3 二人の白皇 No. 18 未

島海晴 Fatal Twelve バースカー 幡田みらい CRYSTAR  
 —クライスタ—

No. 19 佐竹笙悟 Calligula Overdose—カリギユラ

オーバードーズ— シールダー 三ノ輪銀 鷲尾須美は勇者である No. 20

シャロット・ピースレイ 殺人探偵ジャック・ザ・リツパー アヴェンジャー ベル

ベット・クラウ テイルズオブベルセリア No. 21 獅子舞凜火 Fatal

Twelve リフレクター 白井日菜子 BLUE REFLECTION 幻に

舞う少女の剣 No. EX 式島律 Calligula—カリギユラ—(アニメ版)

— — —

No. 主催陣営 — — — 名前 展作 クラス 真名 展作 No.

00 — — ルーラー μ Calligula Overdose

—カリギユラ オーバードーズ— No. 00 ソーン(棗飛鳥) Calligu

la Overdose

—カリギユラ オーバードーズ— エンジェル メフェイス&amp;フェレス CR

YSTAR —クライスタ—

OPネタ「ありふれない仲間たちと異世界へ — The  
End of the World」

(移り変わるトータスの風景とともにタイトルロゴ「ありふれない仲間たちと異世界へ  
— The End of the World」が現れ、ガラスのように砕け散る)

(学園の窓から景色を眺める南雲ハジメ。声をかける白崎香織と翠下弓那の二人に顔を  
振り向く)

(そんなハジメを遠目から不機嫌そうに見つめる天之川光輝。その隣には坂上龍太郎と  
八重垣雫の姿)

(昼の休憩中に喋りながら食事を摂る志村新八、天城なお、弓塚さつき、竈門炭治郎。自  
分の弁当をハジメに分けようとする香織、それに対しまったをかける光輝。その光景を  
見て呆れながらも見つめる弓那)

（教室の床に幾何学模様が浮かび、咄嗟に畑山愛子先生が叫ぶも生徒たちはみな幾何学模様から放たれる光に呑み込まれる）

（日本からトータスへと移り変わる世界。神々しい部屋に立つイシユタル・ランゴバルト。場面が移り、並んで剣を構えるメルト・ロギンスとその騎士団員、そして炎を思わせるような髪型の男。）

（暗い空間の背景に映る6つの人影。正面に鋭い眼光を向ける鬼舞辻無惨。5人の女性を侍らせ笑う謎の少年）

（奈落に落ち行くハジメ、弓那、新八、それに手を伸ばそうとするも届かない香織、さつき。落ち行くハジメの身体が学生服から『豹変後』の元へと変わり、ゆつくり地面に着地すると同時に笑みを浮かべる。その隣にはユエの姿）

（ドンナーとシユラークを放つハジメ、ハジメの援護に魔法を放つユエ。二人の攻撃を体を変化させ、笑いながら戦う『呪霊』。シアはハンマーを、弓那は杖から変化した大剣を振るい大量の魔物を粉碎し、魔法を放つテイオの傍ら新八のメガネだけ映る）

(迫りくる鬼を薙ぎ払っていく炭治郎、さつき、魔法少女アーティ・フレア。刹那に流星のごとく天井を穿ち地面に着地する猗窩座。そのまま炭治郎の日輪刀と突進する猗窩座の拳が鏝迫合う)

(玉座にて不敵に笑うガハルド皇帝、その左右に立つ6人の『将』。右正面:『大きな傘を携えたふさふさ頭のおっさん……かと思いきやかつらが飛ばされハゲ判明』、右端:『白い海軍制服に身を包んだ、すぐ隣で地面に大剣を刺したままのロリ巨乳白髪少女』、左正面:『秘書風の衣服を着た、狐の意匠があしらわれた帽子とイヤリングを付ける、まるで獣のような眼光を放つ女性』、左端:『浅黄色の髪と赤い衣服が特徴的な青年』)

(赤い湖に浮かぶユエ、シア、ティオ、ミュウ、香織、雫の『死体』。それを見たハジメが血の涙を流しながら咆哮を上げ黒い靄に包まれていく。その背後にて笑う『超高校級の■■■』と檜山大介のシルエット)

(血に染まる赤き月下の都市にて、半分異形と化したハジメが全てを破壊せんと魔力を放出させる。放出された魔力を障壁で防ぐ谷口鈴と香織。防がれた衝撃で発生した煙

が止むと、そこには確固たる意思を瞳に秘め聖剣を構える光輝、その隣で、鈴に微笑んだ後に、凜とした表情で光輝と共に暴走するハジメに視線を向ける、白い衣装を纏った中村恵理)

(黄昏の空で嘲笑う『狡知の墮天司』と地上に降り注ぐ魔物たち。それを地上から見上げ、覚悟を決める弓那たち)

(暗闇の中、ハジメのドンナー&シユラークが月明かりに照らされる。そのままフェードアウト)